

## 2023年度 自己点検・評価活動について（報告）

## 1. はじめに

2023年度（今年度）、本学は公益財団法人日本高等教育評価機構による認証評価の受審年度であったため、認証評価用の自己点検・評価活動と、昨年度までと同様の点検・評価シートを用いた本学独自の自己点検・評価活動の両方を実施した。ここでは、本学独自の自己点検・評価活動について報告する。

今年度は新たに導入した本学独自のシステムで自己点検・評価を実施する三年目である。本学の教育の質保証、引いては、内部質保証を行っていくためには、自己点検・評価は必須であり、その意味を全教職員が理解しながら、今年1年間の業務を振り返ってもらえるように進めた。今年度も昨年度、一昨年度と同様に、「全学レベル」「組織レベル」「個人レベル」で自己点検・評価した結果を、他者が評価するという、相互確認の方法で自己点検・評価シートの作成を行った。

## 2. 実施スケジュール

2023年度（今年度）の実施スケジュールは、図1に示す通りである。

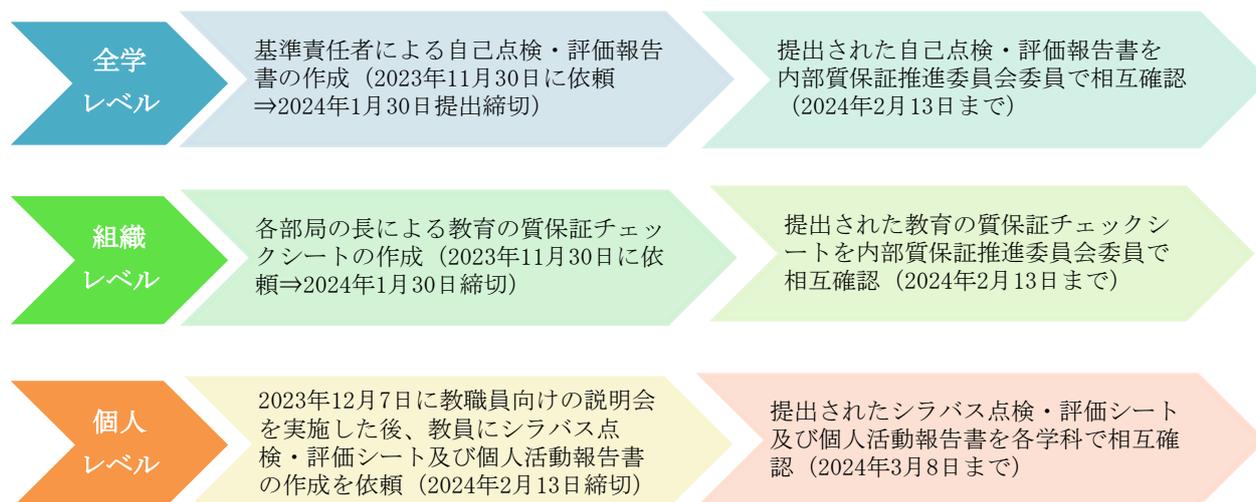


図1 自己点検・評価の実施スケジュール

## 3. 自己点検・評価結果について

## (1) 全学レベル

全学レベルの自己点検・評価チェックシートについては、公益財団法人日本高等教育評価機構における「評価基準」項目、昨年10月の機関別認証評価の現地調査で指摘された項目の2つから構成されている。2022年度（昨年度）は認証評価と同様の書式で自己点検・評価を行ったため、2023年度（今年度）の自己点検・評価結果（基準項目と評定の関係）については、2021年度（一昨年度）の結果と比較して図2に示す。

なお、＜評定（自己点検・評価基準）＞の「A・B・C・D」は、次の状況を示している。

「A」：満たしている／前年度の改善・向上方策：全て達成済
「B」：満たしている／前年度の改善・向上方策：計画進行中
「C」：満たしている／前年度の改善・向上方策：計画検討中
「D」：満たしていない／認証評価で「不適合」若しくは「改善点」として指摘される可能性が高い

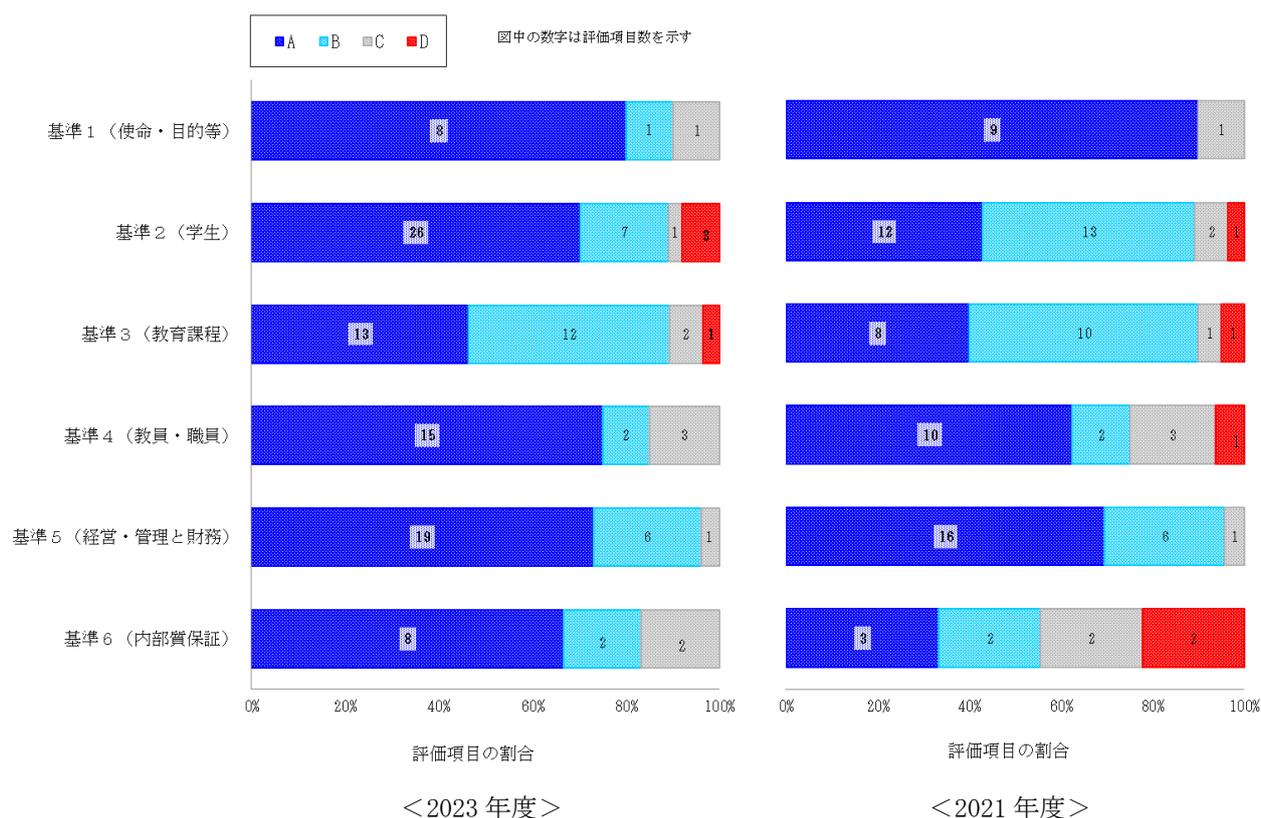


図2 基準項目ごとの評定の状況

基準1については、今年度も一昨年度とほぼ同じ自己評価となったが、それ以外の基準2から基準6については、今年度の方が一昨年度よりも「A」と自己評価している割合が増えている。特に、基準6（内部質保証）については、自己評価結果の改善が認められる。これは、昨年10月に受審した第3期認証評価が「内部質保証機能を重視する」となっていたことから、基準6の項目について整備するようになったからと思われる。今年度「A」と自己評価された項目（89項目）については、来年度（2024年度）も「A」となるよう引き続き実施する必要がある。なお、「A」と自己評価している項目については、「A」のレベルを上げるためにも、来年度、数値目標（指標）の導入について検討が必要である。「B」と自己評価した項目（30項目）については、計画はできているので、その計画を進める必要がある。「C」及び「D」と自己評価した項目（14項目）は表1の通りである。「C」及び「D」と自己評価した項目の多くは、昨年10月の機関別認証評価の現地調査で指摘された項目であり、来年度、進め方を含めて検討が必要である。

表1 「C」及び「D」と自己評価された項目

項目	評価項目
12A	建学の精神の表記・表現方法について検討しているか。（「建学の精神」「建学の理念」など、同じものを指しているのに表現が異なっている。学生等、誰が見ても混乱しないように統一を図る必要がある。）
213	教育を行う環境の確保のため、入学定員及び収容定員に沿って在籍学生を適切に確保しているか。
21C	入学者選抜の適切性（高校時の欠席日数、入学後の学生の成績〔GPA〕、休学・退学率、進路決定率、資格取得状況と、入学者選抜方法との関係）について検討しているか。
24A	KVA スカラシップ制度の適用人数の適切性について検討しているか。

26A	学修行動比較調査結果を学生生活充実のために活用しているか。
313	DPを踏まえた進級基準を適切に定め、厳正に適用しているか。
31B	学務室が運用している学生カルテと教育開発・IRセンターが運用しているスチューデントプラザの相互リンクによる利便性の向上について検討しているか。
33A	ディプロマサプリメントへの「GPS-A」結果の反映について検討しているか。
418	教学マネジメントの遂行に必要な職員を適切に配置し、役割を明確化しているか。
423	FD、その他教員研修の組織的な実施とその見直しを行っているか。
42A	令和5年度の主要授業科目について専任教員が担当しているか。また、専任教員比率を把握しているか。
553	予算と著しく乖離がある決算額の科目について、補正予算を編成しているか。
63A	学修行動比較調査などの結果を使って、どのように改善に落とし込んでいるのか。また、調査で顕在化した課題を学生にどのように成果として見せていくかについて検討しているか。
63B	授業評価アンケートで答えた学生に対して、改善箇所を当該年度内に学生に伝えているか。

[来年度に向けて]

自己点検・評価委員会委員から「Ⅱ. 評価結果」の総評及び課題事項に書かれたことは非常に大切であり、各部局で対応方法を検討して欲しい。主な「Ⅱ. 評価結果」の総評及び課題事項を表2に示す。

表2 主な「Ⅱ. 評価結果」の総評及び課題事項

項目	課題事項
1-1	改組並びに共学化に向けて、使命・目的及び教育目的の設定を適切に実施する。
2-1	学生の受入についての自己評価の項目として「A」と「B」が多いが、定員を大きく割っている状況です。努力はしているが結果が伴わないことについて、業務の項目・内容、やり方などについて、再度、点検評価して、来年度は結果が出るように見直して頂きたい。
2-2	年度毎の退学者数、除籍者数、留年者数などを学科・学年毎に集計して欲しい。また、その理由についても見える形にして欲しい。
2-3	就職満足度（就職しただけでなく、その就職先に満足しているかという「質」の評価）についても検討して欲しい。
2-4	学生の課外活動参加率を向上させる取組について検討して欲しい。
3-1	学生の利便性の向上のために、学生カルテとスチューデントプラザの相互リンクによる利便性の向上について検討する必要がある。
3-2	卒業時調査を活用した、教育内容や教育方法の改善策について検討して欲しい。
3-3	学修成果の点検・評価に資する調査結果を教育の改善や学習指導に活用すること。
4-2	学位プログラムごとのFD活動（研修）の実施
4-3	更なる職員の資質・能力の向上について
4-4	研究環境に関する教員及び学生満足度が分かる資料の作成
5-4	収支均衡に向けての努力
6-2	体制整備と規則類の制定が済んだので、更なる調査や分析を行い、内部質保証につなげて行く必要性

## (2) 組織レベル

組織レベルの自己点検・評価については、2022年度（昨年度）と同様の「教育の質保証チェックシート」で実施した。各部局で作成したチェックシートを他の部局の長が確認するという相互確認の方法で点検・評価した後に、内部質保証推進委員会の委員長（学長）と副委員長で確認を行った。

2023年度（今年度）の「教育の質保証チェックシート」の各部局（5学科・1大学院研究科）のチェック状況（はい・いいえの状況）を、昨年度の結果と比較して次に示す。なお、昨年度は2学部・5学科・1大学院研究科について自己点検・評価を行ったが、今年度は、学位プログラム毎に実施したため、

2 学部の自己点検・評価は実施していない。

## 1. 3つのポリシー

### (1) 卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

ディプロマ・ポリシーに次の各項目に係る記述が含まれている。	今年度		昨年度	
	はい	いいえ	はい	いいえ
• 学生が身につけるべき資質・能力の目標となる記述となっている。	6	0	8	0
• 「何ができるようになるか」に力点を置き、どのような学修成果をあげれば、卒業を認定し、学位を授与するのかが具体的に示されている。	6	0	8	0
• 学生の進路先など、社会における顕在・潜在ニーズに係る記載が含まれている。	6	0	7	1

### (2) 教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）

カリキュラム・ポリシーについての記述	今年度		昨年度	
	はい	いいえ	はい	いいえ
• カリキュラム・ポリシーにおいて、学生や授業科目を担当する教員が分かりやすいように、「①教育課程の編成の方針」「②教育課程における教育・学修方法に関する方針」「③学修成果の評価の方針」の各項目に係る記述が含まれている。	6	0	8	0
• カリキュラム・ポリシーの内容が、ディプロマ・ポリシーに定める「獲得が期待される能力」が獲得可能なことを確認できる程度の整合性を有している。	6	0	6	2
• 能動的学修の充実等、大学教育の質的転換に向けた取組を重視していることが確認できる記述が含まれている。	6	0	8	0
• カリキュラム・ポリシーの内容が大学等の目的と整合性を有している。	6	0	8	0

### (3) 入学者受入の方針（アドミッション・ポリシー）

アドミッション・ポリシーにおいて、次の各項目に「 」内の記述が含まれている。	今年度		昨年度	
	はい	いいえ	はい	いいえ
• 求める学生像については、「入学前に学習しておくことが期待される内容」	6	0	8	0
• 入学者選抜の基本方針については、「入学者受入方針を具現化するためにどのような評価方法を多角的に活用し、それぞれの評価方法をどの程度の比重で扱うのか」	5	1	3	5
• 「受け入れる学生に求める学習成果（学力の3要素）」について、どのような成果を求めるのか	5	0	4	3

## 2. 教育課程・学修成果

### (1) 教育課程

	今年度		昨年度	
	はい	いいえ	はい	いいえ
• カリキュラムマップ、カリキュラムツリー、履修モデル、科目ナンバリングなどで、教育課程の体系性が確認できる。	6	0	8	0
• 教養教育及び専門教育のバランス、必修科目・選択科目等の配当など、カリキュラム・ポリシーに基づいて授業科目が配置され、教育課程の体系性が確保されている。	6	0	8	0
• 初年次教育やキャリア教育に係る授業科目が配置されている。	6	0	8	0
• アクティブ・ラーニング型（課題解決型学習 [PBL]、反転授業、ディスカッション・ディベート、グループワーク、プレゼンテーションなどの要素を含む）科目を開講している。	6	0	8	0
• 情報リテラシーに関する科目（授業全体を通して学生に対して情報活用能力を養成する教育を行う科目であり、ICTを活用した情報分析等の要素を含む内容であることがシラバス等で明記されている科目）を開講している。	4	2	—	—

◆ 企業等の実データ等を用いて組織の課題解決に資するデータ分析などの実践的なデータサイエンス教育を行う数理・データサイエンス・AIに関する科目を開講している。	1	5	—	—
◆ 企業等と協定等に基づき2週間以上のインターンシップ科目を開講している。	2	4	—	—
◆ 大学院において、指導体制を整備すると共に、研究倫理に関する教育・指導が行われている。	1	0	1	0
◆ 研究倫理に関する教育・指導が適切に行われている。	5	1	—	—

(2) 授業の内容・方法

	今年度		昨年度	
	はい	いいえ	はい	いいえ
◆ 授業科目の内容が、1単位につき45時間の学習を必要とする内容になっており、授与する学位に相応しい水準であることを確認している。	5	1	7	1
◆ アクティブ・ラーニング、少人数教育、PBL型授業、フィールド型授業など、学習指導法の工夫が行われている。	6	0	8	0
◆ 全科目のシラバスに、授業名、担当教員名、授業の目的・到達目標、授業形態、各回の授業内容、成績評価方法、成績評価基準、準備学習等が記載されており、ウェブサイトへの掲載等により学生に周知を図っている。	6	0	8	0
◆ CAP制を導入している。	5	1	6	2
◆ 学生による授業評価等の内容を組織的に確認し、授業改善に活用している。	5	1	7	1

(3) ファカルティ・ディベロップメント (FD)

記載状況	今年度		昨年度	
	あり	なし 未記入	あり	なし
◆ 部局(学部・学科・研究科)独自で実施しているFD活動の概要(実施内容・方法、参加者数等)を記載してください。	4	2	2	6
◆ 部局独自のFD活動の参加率を上げるために実施している取組がありましたら、その概要について記載してください。	3	3	1	7

(4) 履修指導体制・学習相談体制

次の取組を実施している。	今年度		昨年度	
	はい	いいえ	はい	いいえ
◆ 履修ガイダンス	6	0	8	0
◆ クラス担任制	6	0	8	0
◆ ティーチング・アシスタント(TA)等の教育支援制度	5	1	7	1
◆ オフィスアワーの設定	6	0	8	0
◆ 学修成果の状況の組織的把握と対応	5	1	7	1
◆ 学習計画の指導	6	0	8	0
◆ 基礎学力不足の学生に対する指導・助言	6	0	7	1
◆ 成績不振者に対する個別学習指導	5	1	—	—

(5) 成績評価

成績評価に関する次の記述に回答してください。	今年度		昨年度	
	はい	いいえ	はい	いいえ
◆ 成績評価基準について、科目の到達目標を考慮した判断基準を組織として定めている。	5	1	5	3
◆ 学生に対して、成績評価基準を刊行物の配付、ウェブサイトへの掲載等の方法により周知している。	6	0	8	0

• 学修成果の評価の方針（アセスメント・ポリシー）に照らして成績評価の分布の点検を組織的に実施している。	1	5	1	7
• 個人指導等が中心となる科目では、成績評価の客観性を担保するための措置を実施している。	4	2	3	5
• 成績評価基準とは別に、成績評価分布のガイドラインの策定や答案の返却、模範解答あるいは採点基準の提示等を行っている。	2	4	2	6

(6) 卒業・修了判定

卒業（修了）判定に関する次の記述に回答してください。	今年度		昨年度	
	はい	いいえ	はい	いいえ
• 卒業（修了）要件が組織的に策定され大学設置基準等が定める要件と整合性を組織として定めている。	6	0	8	0
• 学生に対して卒業（修了）要件を刊行物の配付、ウェブサイトへの掲載等の方法により周知している。	6	0	8	0
• 卒業（修了）要件の審査が定められた手順どおりに実施されている。	6	0	8	0
• 学位論文の審査が定められた手順通りに実施されている。	6	0	8	0

(7) 学修成果

学修成果に関する次の記述に回答してください。	今年度		昨年度	
	はい	いいえ	はい	いいえ
• 標準修業年限内の卒業（修了）率、資格取得の状況、進路状況等を、学部（学科）・研究科として確認し、学修成果の把握・評価に取り組んでいる。	6	0	8	0
• 就職率（進学率）の状況、主な就職先（進学先）を確認し、学修成果の把握・評価に取り組んでいる。	5	1	7	1
• 卒業（修了）時の学生アンケートにより、卒業（修了）時点の学生に対し、大学等の目的及びディプロマ・ポリシーに則した学修成果が得られていることを確認している。	5	1	7	1
• 学修成果を可視化している。	4	2	6	2
• 学修成果の点検・評価結果を教育内容・方法及び学修指導の改善のために活用している。	4	2	6	2
• ディプロマサプリメント（学位証書や成績証明書の補足資料）など、各学生が修得した知識や能力等を明らかにするための取組を実施している。	1	4	—	—

「教育の質保証チェックシート」から分かることは、次の通りである。

[各部局（学科・研究科）の状況]

- 各部局共に、3つのポリシーが適切に策定されている。
- 「授業の内容・方法」「履修指導体制・学習相談体制」「卒業・修了判定」の3つの評価項目の中にあるチェック項目の多くについて、全ての部局が「はい」と回答している。このことは、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーを踏まえた授業の内容・方法が適切に行われており、授業を適切に行うための「履修指導体制・学習相談体制」も整備されている。また、「卒業・修了判定」も厳格に行われていると言える。
- 今年度、新たに点検評価項目とした「情報リテラシーに関する科目の開講」「データサイエンス教育を行う数理・データサイエンス・AIに関する科目の開講」「ディプロマサプリメントの取組」については、「いいえ」と回答している部局が多い。また、「成績評価」のチェック項目の【学修成果の評価の方針（アセスメント・ポリシー）に照らして成績評価の分布の点検を組織的に実施している】と【成績評価基準とは別に、成績評価分布のガイドラインの策定や答案の返却、模範解答あるいは採点基準の提示等を行っている】について、多くの部局が「いいえ」と回答している。アセスメント・ポリシーについては策定され、先月の部局長会議や学務委員会などで報告があったので、来年度はこれらの点検評価項目について、各部局が「はい」と回答することを期待したい。

[各部局（学科・研究科）の優れている取組]

○現代生活学部の全学科

- ・卒業研究発表会を通して学生が4年間の学習で到達した学修成果を確認できるシステムを確立している。

○現代家政学科

- ・毎年、年度初めに各学年で「学びの希望調査」を実施するなど、学修成果把握の取組を実施している。  
また、卒業時に現代家政学科での学びの満足度等について調査している。

○生活デザイン学科

- ・学科教員で共有するスプレッドシートにおいて、学生の学修状況、所属研究室、就職先等の情報を共有している。

○食物学科

- ・全国栄養士協会が主催する栄養士実力認定試験を3年次で受験するよう定めることで（希望者は4年次に再度受験可能）、全国レベルで学修成果が客観的に把握できるようにしている。

○児童学科

- ・教職履修カルテ「マイトレ」と名付けた児童学科独自の自己評価を行い、4年間の学びを振り返る機会を設けている。

○人間栄養学科

- ・FD活動の一つとして、教員たちで勉強会を実施している。  
・国家試験対策として、学力不足の学生に対する「朝活」を行っている。

○人間生活学研究科

- ・大学院生に対して、次の取組を行っている。  
①複数教員による指導体制、②中間発表会の開催、③国内外の学会への参加促進、④他大学や産業界との連携
- ・職業等を有しながら学習を希望する方の学習需要に対応するため、最大4年の期間において修了要件を満たすことで学位等を授与することができる仕組みを整えている。
- ・本学大学院入学前に、本学大学院または他の大学院において修得した単位がある場合は、既修得単位の認定申請を行うことで在学期間を短縮することができる制度を整えている。
- ・東京家政学院大学紀要に修士論文の梗概を掲載し、これを東京家政学院大学図書館のウェブサイトを通じて公開している。

### (3) 個人レベル

個人レベルとして実施したものは、教員を対象とした「シラバス点検・評価シート」と「個人活動報告書」の2つである。「シラバス点検・評価シート」については、2023年度（今年度）、90分授業から100分授業に移行したので、その教育（学修）成果について記載する欄を追加した。「個人活動報告書」については、1年間の活動を教育、研究、大学運営、社会貢献の4つの視点での振り返りに加えて、昨年度と同様に、来年度の活動計画の欄を設けて実施した。

「シラバス点検・評価シート」の100分授業の教育成果については、前回授業の要点の振り返りや振り返りのための小テストの時間（学生の理解度を確認する時間）、学生間の意見交換やディスカッションの時間、授業のまとめやリアクションペーパーを書く時間などに充てることで教育効果が上がった

たというプラス記述と、10分延びたからといって授業回数が15回から14回になれば1回減ることになるので、授業の再編に苦勞した、学生の集中力を切らさないようにするのが大変であった、学生の帰宅時間が遅くなることから教室外学習の時間が十分取れないといった教育効果を疑問視する記述があった。

なお、「シラバス点検・評価シート」の点検確認項目として「学生による授業評価アンケート」をあげているが、後期開講科目について「学生による授業評価アンケート」が届いていないという記述がいくつかあった。「シラバス点検・評価シート」の提出締切日並びに、教員への次年度のシラバス記入締切日（今年度は令和6年1月24日であり、後期の授業が全て終了していない時期に次年度のシラバス締切日が設定されている）については再検討して頂きたい。

「個人活動報告書」については、昨年度と比較して、1年間の活動状況について非常に丁寧にかつ、詳細に記述している報告書が多い。「今年度の各種の活動を振り返って、ご自身の大学教員としての活動を評価してください」の欄に、ご自身の活動についての評価に加えて、大学への要望が書かれている報告書がいくつか認められた。執行部及び部局長（学長・副学長・学部長・研究科長）の方々には教員の声をしっかり聞かれて対応されることが、組織全体の質の向上につながるように考える。

#### 4. 外部有識者からの質問や意見など

本学の2023年度自己点検・評価活動についての外部有識者からの質問や意見は次の通りである。

「優れている」もしくは「素晴らしい」と評価された活動を太字で、修正や検討が必要な質問や意見を下線で表している。

##### (1) 全学レベル

###### 【基準 1-1】

- ・建学の精神のもと、大学の使命・目的、学部・学科や研究科・専攻ごとの教育目的を定め、簡潔な文章で公表している。
- ・創立者の人間観・教育観が、建学の精神・教育理念に反映され、明確な文章で公表している。
- ・昨年自己点検評価書の中に、むこう10か年の長期事業計画を策定すべく始動している、とあったが、その後の短期目標設定や進捗を知りたい。

###### 【基準 1-2】

- ・使命・目的・教育目的の策定・見直しに役員、教職員が関与・参画しており、様々な機会を通じて学内外へ周知している。
- ・2022年に「学院改革及び大学における教学改革の方向性と取組方針」が策定されているが、その後の進捗を知りたい。
- ・使命・目的及び教育目的を三つのポリシーに反映し、使命・目的及び教育目的を達成するために必要な学部・学科・研究科等を整備している。

###### 【基準 2-1】

- ・教育目的を踏まえてアドミッション・ポリシーを定め、様々な方法で公表・周知している。
- ・入学者選抜を公正かつ妥当な方法により、適切な体制のもとに運用している。
- ・アドミッション・ポリシーと入学者受入れ方法との関係について、【学力の3要素と各入試の選抜基準(入

試ごとに重視する要素)】を学生募集要項に示している。

・学生募集に関していくつかの新たな取り組みをしているが、現代生活学部および大学院において入学定員・収容定員を満たしていない。共学化への取組に強く期待している。

・2024年度からの導入をめざしている「入学者選抜方法の検証を実施するためのシステム開発」が何を意味するのか明らかでないので、加筆してはどうか。

#### 【基準 2-2】

・教職協働による学生への学修支援に関する実施体制を整備し、方針・計画を策定している。

・学修支援策として、TAの活用、オフィスアワー制度の全学的実施、障がいのある学生への配慮を行っている。

・障がいのある学生へのサポートとして、学生も含む教職学協働を進めてはどうか。

・クラス担任による学生面談、成績不振学生に対する学修指導が導入されており、入学予定者に対するスクリーニングを実施予定で、新入生に対する大学生活への順応も促されている。

・中途退学、休学、留年などの学科ごとの実態はエビデンス資料にあるが、その原因分析、改善方策の検討状況などを、エビデンスとともに示した方が良い。

#### 【基準 2-3】

・キャリア支援に関する教育課程内外の支援体制、就職・進学に対する相談・助言体制が整備、運用されている。

・就職支援として各種講座を開設し、個別の就職相談も実施されている。

・令和4年度の就職希望者の就職率が最終的に97%を超えているのに対し、エビデンス資料によれば、令和5年度の卒業予定者のうち3割弱が就職を希望せず、卒業予定者の3割程度が1月末段階で内定を得ていない状況について、分析と対策が望まれる。

#### 【基準 2-4】

・学生サービスのための組織を設置し、健康相談等や課外活動への支援を行っている。

・学生に対する奨学金等の経済的支援を行っている。

・学生への支援状況、課外活動への支援状況、保健室や学生相談室の利用状況、奨学金給付等の実態を示すエビデンスが提示されている。

#### 【基準 2-5】

・校地、校舎等の学修環境、実習施設、体育施設、図書館等が整備・運営・管理されている。特に、**ノートPCの必携化やICT環境の整備を進めたことは評価できる。**

・実習施設、体育施設、図書館の利用状況や蔵書状況を、エビデンスとして示したほうが良い。

・施設・設備の利便性（バリアフリーなど）に配慮している。

・教育効果を考えて適正か、授業のクラスサイズの分布程度はエビデンスとともに示した方が良い。

#### 【基準 2-6】

・学修支援に関する学生の意見・要望を把握するシステムを整備し、学修支援の体制改善に反映している。特に、**履修登録サポートに学生が参画していることは評価できる。**

・昨年も指摘したが、学修行動比較調査、卒業時学生調査等の学生調査の結果分析と検討結果の活用が早急に望まれる。

#### 【基準 3-1】

・各学科・専攻の教育目的を踏まえ、ディプロマ・ポリシーを定め、周知している。

・学部のディプロマ・ポリシーを踏まえた単位認定基準、卒業認定基準を定め、周知している。

- ・学部・大学院において、進級基準を早急に設ける必要がある。
- ・大学設置基準の改正により、授業方法別に必要な授業時間数の基準を定めた規定が廃止されたので、各授業の「1コマ当たりの授業時間」「1週間当たりの授業の実施回数」「必要な授業外学修」を再確認し、必要であれば学則の「単位の計算方法」を改訂することも可能である。

- ・学部の単位認定基準、卒業認定基準等を厳正に運用している。
- ・修士論文に関する審査基準をふまえた学位審査をしているというエビデンスを示した方が良い。

#### 【基準 3-2】

- ・各学科・専攻の教育目的を踏まえ、カリキュラム・ポリシーを定め、周知している。
- ・カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーの一貫性を担保し、カリキュラム・ポリシーに沿った教育課程が体系的に編成されているとするエビデンスが弱い。履修系統図だけでなく、ディプロマ・ポリシーの各項目の修得を担保する主要授業科目を策定した方が良い。

・シラバスの相互チェックをしているというエビデンスを示した方が良い。大学院についても、シラバスの相互チェック体制を整えた方が良い。

・年間履修登録単位数上限に含まれない科目群があるが、含まれない合理的理由をエビデンスとともに示した方が良い。

・共通教育科目の実施状況から課題を確認し、改善につなげる議論が共通教育部会でされていると想像するが、その議論の状況をエビデンスとともに示した方が良い。

・教授方法として取り入れている様々な方法について、取り入れることによって実現したいことが実現できているのかの確認検討を、FD委員会等を中心に実施すると良い。

#### 【基準 3-3】

- ・ディプロマ・ポリシーを踏まえた目指すべき学修成果について、より明確に示した方が良い。
- ・学生の意識調査、卒業時の満足度調査、企業アンケート、授業アンケート等が実施されているが、それらを改善につなげるシステム構築が必要である。

#### 【基準 4-1】

・学長がリーダーシップを発揮するため、副学長・執行部会議・部局長会議という補佐体制が確立されている。

・規則等を整備し、執行サイドの権限の適切な分散と責任の明確化、教授会の組織上の位置付けと役割の明確化がなされている。

・教学マネジメントの遂行に必要な委員会等に、職員も配置し、参画している。

#### 【基準 4-2】

・大学設置基準および大学院設置基準で必要な専任教員が配置され、教員の採用・昇任・再任についての手続きが規定されている。

・授業評価アンケート結果に対する担当教員からの報告書提出、教員相互の授業参観、FD講演会が組織的に行われている。

・学外のVOD教材やオンライン研修が充実してきていることから、貴学における教職員の能力開発の目的・目標を定め、個別ニーズに沿った能力開発の機会の情報提供を行ってはどうか。

#### 【基準 4-3】

・職員の資質・能力向上のための研修等が組織的に実施されている。

#### 【基準 4-4】

・若手研究者等研究費助成制度やクラウドファンディングによる外部研究資金の獲得にむけた取組がなさ

れ、研究環境の充実が図られている。

- ・ 研究倫理に関する研修会が実施されているが、4年次学生や院生も対象者としてはどうか。

【基準 5-1】

- ・ 組織倫理に関する規則や情報の公表に関する法令等に基づき、適切な運営を行っている。
- ・ **理事の女性比率を過半数、監事を男女同数、学外理事に他大学で理事の経験があり実績のある者を複数名選任するなど、経営規律の向上に向けて取り組んでいることは評価できる。**
- ・ 使命・目的を実現するため、年度ごとに事業計画を策定・実行している。
- ・ 環境や人権に配慮しつつ、学内外に対する危機管理の体制を整備している。

【基準 5-2】

- ・ 使命・目的の実現にむけた意思決定をするための理事会・常任理事会、監視・牽制機能等を果たす評議員会といった体制が整備され、機能している。

【基準 5-3】

- ・ 理事会 - 常任理事会 - 部局長会議 - 教授会の組織的連携を図り、審議決定の流れを適切かつ円滑に行うため、各機関が相互チェックする体制が整備されている。
- ・ 監事の選任、理事会及び評議員会などへの出席状況が示され、職務が適切に行われている。
- ・ 評議員の選任、評議員会の出席状況が示され、運営が適切に行われている。

【基準 5-4】

- ・ 中長期的な計画と財務計画に基づいて財務運営を行っている。
- ・ 「経営基盤を維持するための緊急対策」を策定・実行しているが、支出超過が続いており、財務基盤の安定化が望まれる。

【基準 5-5】

- ・ 学校法人会計基準や経理に関する諸規則に基づく会計処理を適正に実施している。
- ・ 監事による監査を行う体制を整備し、厳正に実施している。

【基準 6-1】

- ・ 内部質保証に関する全学的な方針を明示、恒常的な組織体制を整備し、責任体制が明確になっている。

【基準 6-2】

- ・ 内部質保証のための自主的・自律的な自己点検・評価を、全学レベル・組織レベル・個人レベルで、毎年度実施している。
- ・ 自己点検・評価の結果が学内で共有され、HPの「自己点検評価」では令和4年度まで公表されているが、HPの「情報公開」では平成30年度までの公表にとどまっている。

- ・ 教育開発・IRセンターを設置、授業評価アンケート結果の活用方法の検討、学修行動比較調査の活用の検討がされている。

【基準 6-3】

- ・ 内部質保証のための自主的・自律的な自己点検・評価を、全学レベル・組織レベル・個人レベルで、毎年度実施している。
- ・ 自己点検・評価結果がさらなる改善につながるような仕組みが望まれる。

【独自基準】

- ・ 基準「学校間・企業間・地域との連携」について、「基準項目」「評価の視点」が設定されている。
- ・ 「地域と学・教・職が共に成長する活動展開」に関し、連携活動がなされ、地域のニーズをトータルに受け止める仕組みを強化した結果、何を目指すのか知りたい。

### 【基準 1】

- ・全体的に、昨年度に比べてエビデンスに基づいた自己点検・評価が前進しているように拝見しました。
- ・ただ、評価結果の総評にも記載されている通り、No. 114 については状況説明および自己評価を「B」としたエビデンスが示されておらず、とりわけ R3 の「C」評価と比べて、何をもちて「B」評価と判断したのかがやや気になりました。
- ・また、課題事項の努力課題として、「改組並びに共学化に向けて、使命・目的及び教育目的の設定を適切に実施する。」ことが記載されていますが、きわめて重要かつ大きな課題だと拝見しました。可能であれば、検討作業のプロセス等もお聞きできればと思いました。もし基準項目 1-2<今年度の伸長・改善計画>の 12A に記載されている「「建学の精神」「建学の理念」についての位置付けについて、まずは執行部会議で議論を開始する」ことと関連しているのであれば、補足説明いただければ幸いです。

### 【基準 2】

- ・総評にもある通り、アドミッション・ポリシーの策定及び周知並びに、ポリシーに基づいた入試の選抜が行われていると拝見しました。この点で質保証システムが機能しているものと理解しました。
- ・入学者定員の確保については、さまざまな取り組みが結果に結びつかない状況ということで、組織的な最優先課題の一つかと考えます。その上で、R7 年度に予定されている育成型の新たな入試制度がどのようなものなのか、もう少し補足説明いただければ幸いです。
- ・オープンキャンパスの参加者に手書きコメント入りのサンキューレターを送付している点は、志願者とのエンゲージメントという点で優れた取り組みだと思います。
- ・学修支援については、組織的な体制に立脚しつつ、学生一人一人へのよりきめ細やかな対応がなされています。一方で、222 から 22A は、課題事項と伸長・改善方策に「今後も同様に続けていく。」と記載されており、具体的にどのような伸長・改善方策を実行するのが不明確です。
- ・「就職を希望しているにもかかわらず、就職活動を行った形跡のない学生のケース」もあるとのことですが、こうした学生の存在をどのようにモニターし、キャリア教育支援につなげようとしているのか、補足説明いただければ幸いです。
- ・奨学金等の経済的支援や情報提供は重要ですが、貸与の場合は返済等に関する説明（いわゆる金融教育）はされているのでしょうか。派生的な質問ですので、可能であればご教示ください。

### 【基準 3】

- ・単位認定・卒業認定・修了認定および教育課程及び教授方法については、概ね DP や CP をふまえた組織的な取り組みが前進しているものと拝見しました。
- ・学務室が運用している学生カルテと教育開発・IR センターが運用しているスチューデントプラザの相互リンクによる利便性の向上については、「計画的に検討していく」と記載されていますが、どのように計画化しているのか、補足説明いただければ幸いです。
- ・PDCA サイクルの C から A へとつながるフェーズに相当する、教育課程に関わる効果検証は難しい課題ですが、現在取り組みが進行中であると理解しました。32B、32D については、今年度中にアンケートを実施するとありますが、具体的に誰を対象にしたどのようなアンケートなのか、その結果からどのような情報を得ることが目指されているのか等、補足説明いただければ幸いです。
- ・上記の点と同様、学修成果の点検・評価もサイクルの構築に相応の時間がかかる取り組みだと考えます。自己評価も全体的に「B」評価が多いのも、組織レベルの取り組みが開発途上にある状況を反映しているものと拝察します。引き続き、各種アンケートで得られたデータや情報を積極的に活用していただければと

思います。

・企業アンケートはパイロットの位置付けで実施されたとのことですが、アンケートの実施に関わる何らかの示唆（調査項目の改善等）は得られたのでしょうか。パイロット調査のエビデンスを提示すればなお良いと考えます（大学のHPでは集計結果が確認できました）。

・全体的に、本基準はエビデンスが空白になっている項目が比較的多いように思いました。

#### 【基準4】

・学長がリーダーシップを適切に発揮するための補佐体制が整備され、使命・目的を達成するため、教学マネジメントの構築がシステムとして機能するよう組織的に取り組まれていると拝見しました。

・今年度の伸長・改善計画の411～414で「大学の教学全体をカバーする領域別の機構」を設けることが記載されていますが、具体的にどんな領域別の、どのような機構なのかを補足説明していただければ幸いです。

・評価結果の通り、項目 No. 418 の自己評価「C」と説明がやや噛み合っていない点が気になりました。

・全学的なFD活動では時宜に適ったテーマが取り上げられており、十分な実績が認められますが、課題とされている「学位プログラムごとのFDの実施状況や取り組みの成果を示す資料の蓄積」をどのように行うのかについて、補足説明していただければ幸いです。

・研究活動への資源配分に関する規則を整備し、設備などの物的支援とRA（Research Assistant）などの人的支援については、自己評価が「B」に上がっており、取り組みが大幅に改善したことが認められます。

・「研究成果公開促進助成に関する要項を制定し、助成費用として科研費の間接経費を活用する」とありますが、これは科研に採択されていない専任教員も申請可能な制度だと理解してよろしいでしょうか。

#### 【基準5】

・「長期計画を策定し（本年3月理事会決定の予定）、PDCAを確実にを行うためにKPIを定めることとした」とある点は、PDCAサイクルを実質化する上でたいへん重要な取り組みだと考えます。どのようなKPIおよび基準、推進責任者の設定を想定しているのか、補足説明をいただければ幸いです。

・**理事長のリーダーシップのもと、多様性に配慮し、大学教員経験者、中高教員経験者、大学職員経験者、企業経験者などが意思決定に参画する体制が敷かれている点は高く評価できます。とくに、理事の約半数が女性で、ジェンダーバランスにも配慮されている点が優れています。**ちなみに、具体的な属性等が確認できる名簿等はエビデンスとして添付できないのでしょうか（議事録等には氏名記載があることは確認しました）。

・**学術系クラウドファンディング事業の実施は、社会における大学の認知度を高める上でも有効な取り組みだと評価できます。**その上で、研究活動の活性化はもちろんですが、それらの成果が学習・教育にいかに関元され、大学としての魅力のアピールにつながるのかという中長期的な視点を据えることも重要ではないかと思いました。

#### 【基準6】

・全体的に、内部質保証の取り組みが推進されるように、全学的な方針の明確化や、組織体制および責任体制の整備ならびに明確化が前進していることが確認できました。とくに、大学機関別認証評価の受審年ということもあり、内部質保証の組織体制の強化が一気に進められた印象を受けました。

・「自己点検・評価の結果を学内で共有し、社会へ公表していること」、「現状把握のための十分な調査・データの収集と分析を行える体制を整備しているか」がいずれも「D」から「A」に評価が向上しており、**内部質保証システムの基盤が整備されていることが確認できます。**

・「**東京家政学院大学教学IRデータの取扱いに関する細則**」が定められている点は優れています。







- ①仕組みはシンプルにし、既存の委員会等で自己点検・評価を行えるようにする。
- ②大学の教育理念・目的及び三つのポリシーを起点とした内部質保証が行われ、教育の改善・向上への反映ができる体制を構築する。
- ③部署毎に掲げた事業計画に沿って項目を立て、報告書を作成する。
- ④報告書については、様式を統一し、項目毎にPDCAの状況を簡潔にまとめる。
- ⑤全教職員が自己点検・評価に関係する。(自己点検・評価のスケジュールを作成し、全教職員に共有する。)

本学に「全教職員が協力して自己点検・評価する習慣」は何とか根付かせることができたように思う。

(2) 次年度からは自己点検・評価した結果を確実に内部質保証につなげていくシステム構築という新たな段階に入る。新たなシステム構築に向けての工程案を次に示す。

#### ① 3年間の自己点検・評価結果の振り返り

全学レベルについては、基準毎に自己点検・評価報告書の最後にある「Ⅱ. 評価結果(総評、課題事項など)」と、「外部評価委員からの指摘事項」などを確認し、2024年度(次年度)の業務のあり方を考えて欲しい。

組織レベルについては、「他の部局の優れた取組」や「外部評価委員からの指摘事項」などを確認し、次年度は点検評価項目の回答が「はい」となるようにして欲しい。1つの部局だけで対応が難しい項目については、内部質保証推進委員会に対応方法を進言して欲しい。

個人レベルの個人活動報告書については、教員の方々は学科長からのコメントを参考にして、次年度の教育研究活動等の一層のレベルアップを期待したい。本学は専門分野の異なる教員から構成されている。今後は、異なる分野をつないで新たな研究テーマを作れるような取組も必要に思う。

#### ② 点検・評価シートの見直し

全学レベルについては、公益財団法人日本高等教育評価機構における「評価基準」項目に基づいて点検・評価シートを作成している。本学は小規模大学であり、教職員の人数も少ないので、できるだけ通常業務に支障を来さないよう効率的な点検・評価シートにしたつもりであるが、提出期限までに点検・評価を終了できる部局が少ない。各部局で点検・評価シートの見直しを含めた効率的かつ実効性のある(内部質保証につながる)点検・評価活動について考えて欲しい。

組織レベルについては、ほぼ全ての部局が期限通りに点検・評価活動を終了している。部局毎の相互確認も円滑に行われている。確認方法として「はい・いいえ」の二択ではなく、「いいえ」でも「全く対応していない」「計画中(検討中)」「計画は終了し実行している途中である」といったような段階評価を取り入れることも考えて欲しい。

個人レベルの点検・評価シート(個人活動報告書)については、大学組織を構成している教員一人一人に、教育、研究、大学運営、社会貢献の4項目について意識して取り組んでもらえるように点検・評価項目を考えている。1年目は各項目について数行しか書いていない教員が多かったが、2年目、3年目と進むに従って、ご自身の1年間の活動を振り返ってしっかり点検・評価した報告書が増えている。この報告書の活用方法について考えて欲しい。

#### ③ 今後の点検・評価活動について

- ・大学としてビジョンを踏まえた、本学としての戦略的・組織的な自己点検・評価活動

- ・ 今後は、学修成果を基軸に据えた内部質保証が重視されると考える。学生の学修成果（学生の成長値）に力点を置いた自己点検・評価活動

- ・ 第4期機関別認証評価の方向性を確認した上での本学としての自己点検・評価活動

第4期における基本的な方向性は次の通りである。

- 1) 学習成果を基軸に据えた内部質保証の重視とその実質性を問う評価
- 2) 大学の取組の有効性・達成度を重視する評価
- 3) 学生の意見を取り入れた評価
- 4) 特色ある取組の評価
- 5) 効果的・効率的な評価の実施

(3) 最後に、昨年度の報告書にも書いたが、各部局共に、非常に多くの素晴らしい活動をしているように思う。その活動で生まれた成果を可視化することを意識した対応をお願いしたい。そして、背伸びをする必要はないので、本学の実情に合った主体性を発揮できる自己点検・評価システムを一つずつ構築して行って頂きたい。

## 6. 学長による総括

2023年度の自己点検・評価は、全学レベル、組織レベル、個人レベルについて自己点検・評価チェックシートを用いた本学独自の自己点検・評価を行った。11月末から2月にかけて、2021年度と同様の方法で実施した。ただし、本年度受審した機関別認証評価（公益財団法人日本高等教育評価機構）の現地調査を踏まえて、項目を追加し、全学レベルについては、2021年度の結果と比較し、組織レベルについては、2022年度の結果と比較した。

チェックシートによる自己点検・評価においては相対的に達成度が高まっている傾向が見られるが、基準項目によって達成度に差がある。達成できたものについては、さらに踏み込んだ目標設定や向上方策を検討していく必要がある。また、学科特有のものについても、自己点検・評価の対象にして行くことを視野に入れたい。

今年度も、外部有識者委員および外部評価員には、自己点検・評価書等に丁寧に目を通していただき、数多くの質問や指摘、励ましの言葉をいただいた。心から感謝したい。ご指摘を受け止め、今後の改善に活かしていく所存である。

外部有識者委員からの指摘にもあるように、エビデンスが不十分な項目が散見される。エビデンスの準備方法を工夫することが、今後の課題である。

今年度は、機関別認証評価受審の年で、時間的にも余裕がなく、長所短所の把握を改善活動に十分活かすまでには至っていない。また、自己点検・評価活動においては、教職員が日々意識して活動することが望まれる。次年度は、この3年間の自己点検・評価活動の結果を改善に活かすことに力を入れたいと考えている。

以上